

# 松村通信第107号

2020年4月16日  
松村勝弘

## なぜ日本は行き詰まったか

**コロナ騒動での日本の危機** 前々号105号でリチャード・クー『「追われる国」の経済学』を紹介した。彼は先進国における投資機会の減少は深刻だと言っていた。この点についてすでに、森嶋通夫『思想としての近代経済学』岩波新書、1994年、で論じられていたので、これを再読し始めたが、その前に森嶋通夫の晩年の著書に目を通しておきたいと思い読み始めたのが、1999年に書かれた『なぜ日本は没落するか』と、2000年に書かれた『なぜ日本は行き詰まったか』である。前者は2010年に発行された岩波現代文庫版（以下森嶋[2010]と略す）で読み、後者は2005年に出版された『森嶋通夫著作集14』（岩波書店）（以下森嶋[2005]と略す）で読んだ。とりわけ最近のコロナ騒動を見ていると、もちろんその前の安倍首相をめぐるさまざまな問題[森友問題など]噴出とも絡めてみると、森嶋通夫が2050年の日本はこうなると予測していたことが、もっと早まりそうに思えてくる。

森嶋は2050年の日本を予測するには、その時日本をリードしているであろう人達の今、すなわち今の若い人達がどのような教育を受けているかを見ればわかるという。だから、今の状況は現在時点から40～50年以前に現在をリードしている人達がどのような教育を受けたのか、いわゆる戦後教育を考えてみればわかるわけである。

**戦後教育改革の結末** 戦後教育改革では米占領軍の指導の下で、それまでの教育勅語・儒教的思想が排され、民主主義、自由主義が盛んに教育された。ところがそれを教えた教師はそれまで自分たちが学んできたものと異なる民主主義、自由主義の本質を知っていたわけではなかった。いわばまがい物の民主主義が教えられたに過ぎなかった。「戦後の教育改革は不可避であり、日本が戦前の日本型儒教に決別したことには異存はない。しかしそれに代わって導入されるべきであったのは、アメリカ式教育でなかった方がよかったと私は思う。……当時の日本にアメリカ式の教育をしきれる教師がほとんどおらず、中途半端な疑似自由主義、疑似民主主義が教えられたに過ぎないという問題がある。戦前の教育を受けた親たちは、これらの疑似諸主義に対する批判力はなく、親が無言化することによ

て家庭教育も崩壊した。親と子供の間には対立があるだけで、対話は消滅した。」（森嶋[2005]14-15頁）

しかも「戦後、大人の社会には大きな変革が試みられたことはなく、伝統的な一極端な場合には封建時代以来の一心情やしきたりは温存されたままで存続した。こういう社会は儒教的構造を持つと言ってもよいが、儒教倫理の筋が社会にはっきり通っていたわけでもなかった。それは、人々は自分自身の良心に忠実でもなく、身を処するに厳格でもなく、嘘もまた方便であると考え、利益を得るためには人におもねって当然と考えるような、倫理的な自覚に欠けた土着的共同社会にすぎない。」（森嶋[2005]15頁）

**親世代と子供世代の分裂** 親世代は儒教的教育を施されて、それに浸っていたが、急に民主主義が叫ばれたが、当然民主主義が身につけていたわけではなかった。他方で子供たちは学校で民主主義、それも中途半端なそれを教えられ、家庭内では本来親世代が子供を社会に出るための通過儀礼として「世の中はこう生きるものだ」と教えなければならなかったが、すでに敗戦で自信を失っていたので家庭教育が行われなかった。私の経験でも親からあまり教えられた記憶がない。あえて言えば、人様に迷惑をかけてはいけない、程度の教えを受けたように思う。

戦後「教育の改革は、日本人の魂を変えてしまったことを強調しなければならない。当時の人々はその大改革を敗戦にともなう致し方のないものとして、しぶしぶ受け入れたのであるが、その教育を受けた子どもたちは新しいタイプの『アメリカ化された』日本人として育った。しかもその教育は、教えている理念がよくわかっていない先生たちによって教えられたのである。そういう教育を押しつけた側は、日本人がアメリカ人と同じようになることを期待していたのかもしれないが、西欧の精神を理解しない先生に教えられた子供たちは西欧人としても落第生の子供一利害に関しては自己中心的で、知識に関しては記憶重視的で、なぜそうなのかを尋ねることがなく、社会活動に関しては、自分の主張がなく多数派にくみするような人一に育った。そういう子供は、日本の伝統社会の悪習に十分染まり、自分に得になることなら何でもやり、積極的主張は何もしない型の日本人に育った。」（森嶋[2005]44-45頁）

**無魂洋才** こういう教育を受けた子供たちの間で利己主義が跋扈するであろうことが理解できる。明治日本においては「和魂洋才」とばかりに、儒教思想と欧米的科学技術・社会制度が併存していたが、徐々に欧米列強に伍するほどに国力がついてきてナショナリズムが高揚し、国家主義が称揚され、ついに太平洋戦争に突入したが、敗戦により今度はアメリカ民主主義が受け入れられたが、その背景は全く無視されて、形式のみが受容された。自信を失った大人から哲学的なものが何も教えられず、日本人は「和魂」を見失った。だから戦後は「無魂洋才」で目的思考のないままに経済成長が押し進められた。戦後「企業公器」論を叫ぶ人もいたが、バブル以後それも影が薄い。私益中心主義が跋扈している。

**ノブレス・オブリージの欠如** 欧米において民主主義、自由主義が、放縦でないことは自明であったが、日本では「無魂洋才」であるだけに、哲学抜きで経済至上主義がまかり通った。教育でも何のために勉強しているのか全く自覚されないまま、成績至上主義におちいった。底流に儒教的なものが残っていたので成績優秀な者は官僚として立身出世するのがよいことだとばかりに哲学抜きで学歴競争に走った。他面悪いことといわゆる民主主義の名の下で、極端な場合成績で優劣をつけるのは差別主義だというような「平等」が唱道されたりもした。元来高等教育は社会の指導者を生み出すための教育のはずであった。戦後エリート教育が否定され、高い意識を持ったエリートが生み出されなかった。ノブレス・オブリージ(高い地位には高い義務が伴う)が意識されなくなった。戦前は旧制高校などがノブレス・オブリージを涵養していた。その教育を受けた人達が戦後復興期に活躍し、オイルショック頃まではそのような人達が日本をリードしていた。その後ずっと新制教育で育ってきた人間が支配層を占めるようになる。

森嶋はいう。「新制教育はいかなる種類の特殊性や属性も称賛することを避けるように型どおりに実施された。生徒の記憶力は促進されたが、彼らの価値判断の能力は低下した。彼らは事実を記憶するのは非常に上手になったにもかかわらず、論理的思考に弱くなったので意志決定には優れていない。非常に高い大学進学率の結果として、教室は極めて騒がしくなった。今日の日本では、高等教育はもはやエリート主義のための前提ではない。ノブレス・オブリージ(高い地位には高い義務が伴う)の精神は、もはや日本の社会のどの片隅にも行きわたっていない。国家は知識人が指導的エリートの役割を演じるように形づ

くられるのが儒教国家であるという理由からいえば、これは日本にとって決定的な打撃である。日本は底辺から崩れるのではなく、むしろトップから崩壊する危険性が大きい。」(森嶋[2005]311-312頁)

**日本はトップから崩壊する** 「日本は底辺から崩れるのではなく、むしろトップから崩壊する危険性が大きい」とはよくいったもので、今の日本を見ていると、残念ながら今日すでにそれを実感せざるを得ない。森嶋はいう。「現在の日本人は、……創造性がなく、自分の意志を相手に伝える力を持っていない。日本の政府も財界も官僚たちも全員が上品なお坊ちゃんの集団で、相手を自分の論理で徹底的に説得するという迫力がない。その上、新しい構想を組み立てるほどの論理的思考力がない。」(森嶋[2010]80頁)

「論理的思考力がない」、そして迫力もないお坊ちゃんをトップにいただく日本の現状を見るのは悲しいことだ。日本の政治の劣化は目を覆うばかりだ。今日あまりにも論理、ロジックがないがしろにされ、ムードに流されて、議論が行われないままに決定されるので、指導者もロジックを鍛える努力をしなくても多数派を形成すればトップになれてしまう。政治家が自らの政策を論理的に説明し納得させようと努力しなくても、数の力で押し通せてしまっている。こんな状況だから、今日の日本の政治指導者に人を得ないのは当然かもしれない。それが国内で通用してしまっている。それでは海外で通用するはずもない。これでは日本が世界に伍していけるはずがない。だから森嶋は 2050 年の日本を悲観的に予測している。「日本のリーダーたちがこんなにひ弱く、かつ自信をなくしている限り、日本は自分がかみ込んでいる罠から脱出する力を持つ見込みはなく、日本の苦悩は限りなく続きそうである。

生活水準は相当に高いが、活動力がなく、国際的に重要でない国。これが私の二一世紀半ばにおける日本のイメージである。」(森嶋[2005]336頁)

しかし、森嶋が予測したより早くそんな日本がやってきているように思える。コロナウイルス騒動を見ているとそう思えてくる。この騒動以後の日本はかなり悲惨なことになるのではないかと危惧せざるを得ない。

HP, FBを見て下さい。又何でも意見を。  
皆さんのご意見を歓迎します。HP  
(<http://www.ritsumei.ac.jp/~matumura/>) もご覧下さい。  
フェイスブックもやっています。また、メールで意見  
交換しましょう。メールをよこして下さい  
([matumura@mba.ritsumei.ac.jp](mailto:matumura@mba.ritsumei.ac.jp))。